

2020年(A年) 年間第14主日(7/5)～年間第17主日(7/26)のみことばの典礼の構成と内容

| | | | | |
|---------|---------|--------------------------|-------------------------------|--|
| 7/5(日) | 年間第14主日 | マタイ 11・25-30 | わたしは柔和で謙遜な者である | 軛を負うことと本当の安らぎ 植物(種、麦)の表象を持って語られる天の国のたとえ |
| 7/12(日) | 年間第15主日 | マタイ 13-1-23 or 13・1-9 | 種を蒔く人が種蒔きに出て行った | |
| 7/19(日) | 年間第16主日 | マタイ 13・24-43 or 13・24-30 | 刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい | |
| 7/26(日) | 年間第17主日 | マタイ 13・44-52 or 13・44-46 | 宝を見つけた人は、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う | |

マタイ 13章:「天の国のたとえ」の解説 (並行箇所: マルコ 4章、ルカ 8章)

【読み方のヒント】

- マタイ 13章はマタイ福音書全体の5大説教の一つ。①5-7章{山上の垂訓}、②10章{弟子たちの派遣}、③13章{天の国のたとえ}、④18章{教会論}、⑤24-25章{終末論}
- 13章には7つのたとえがある。①種まき、②毒麦、③からし種、④パン種、⑤隠された宝、⑥よい真珠、⑦(地引)網
- 「たとえ話」で使われた題材…当時の人々にとって動物や植物の表象は、私たちがイメージするのは比喩物にならないくらいわかりやすいものだった。イエスは植物のように最もわかりやすいものをたとえに使った。たとえは全く違う領域にある二つのものを比較し、よく知られている方から全く知られていない方(霊的真理、道徳的教訓)をわからせる表象法。人の関心をそそり、聞く者に考えさせ、真理や思想、概念を具体的に示すことができるが、聞く態度(耳)を持つ者しかその真理を悟ることができず、偏見や曲った心を持つ者に対しては逆に真理を隠す役割をする。
- **場所の重要性**: 「(13:1-2) イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。大勢の群衆がそばに集まって来たのでイエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆は皆岸辺に立っていた。」船にいるイエス VS 湖のほとりの群衆; 座って教えるイエス VS 立って聞く群衆 ⇒ 「(13:36-37) イエスは群衆を後に残して家にお入りになった。弟子たちがそばに寄って来て「畑の毒麦のたとえを説明してください」。イエスはお答えになった…」群衆と弟子の間にある溝: ⇒ 天の国の秘密を明かされる弟子たち VS それが明かされない群衆(13:11-12)、家の中で説明を聞く弟子たち VS 説明なしで帰っていく群衆(13:36)。 **13章独自の“対比(弟子たち VS 群衆)”という枠組み**たとえを理解する者 VS 理解しない者; 聞く耳を持ち聞く者、聞いても理解できない者
- 植物に関するたとえ話の下地にあるもの…植物の(特に種に関する)たとえ話には「草木が人間の知らないところで成長していく」という考えがあ

る。「種⇒芽⇒茎⇒枝⇒葉⇒花⇒実り⇒種」のプロセスに人間が関わるのはほんの少しであり(水をやりよい土地を整えることぐらい)、そのほとんどは知らない間に進んでいく。つまり、植物に関するたとえで神の国が語られるとき、神の国(=天の国)は人間の努力で完成するものではなく、イニシアティブはもちろん、実りまでのプロセスの大部分は、神ご自身の業によるものであり、神が働いてくださるから完成するのが神の国であるという論点が共通して存在する。

- しかし、これは人間の果たすべき務めや努力の否定を意味しない。我々にはできる限りよい土地になって、いただく神のみことば(恵みという種)を実らせなければならない。「人間の努力」と「神の働き」(神学的には「人間の自由や功績」と「神の業や力、または御摂理」の関係に関する問いと謎)
- よい土壌となる=**聞きなさい**という命令形の重要性(このたとえの主題)。人間がすべきことが明確になっていない理由: それぞれの使命は違う?
- 毒麦のたとえには「刈り入れ」が出てくるが、これは終末論。一般的に刈り入れは終末(「僕たち(27節)」⇒「刈り取る者(30節)」に変化)を表す。それまでは“善と悪の判断が難しい(=よい麦まで一緒に抜くかもしれない)”。これがポイントで「**神はそれまで待つ(神の忍耐)**」とたとえは教える。しかし、最終的に神は善悪をはっきりさせ、善を救い、悪を滅ぼす。
- パレスチナでは麦と一緒に毒麦が育つことがしばしばあり、その判断と毒麦だけの回収は実りの前には難しかった。→善悪の性急な識別と分離は危険であるという教え+分離主義者“ファリサイ派への人々の非難がある。
- このたとえには終末論に合わせて、当時の教会内への考え方がある。神は、悪とは無関係の方(創世記三章)であるから悪は敵(サタン)の仕業である。教会は本来正しい者の集まりであるはずなのに、なぜ悪い者がいるのか(22:12)、どう対処すべきか(18:15-17)というマタイ自身の問題に対する理論的な答えになっている。しかし、マタイ福音書には最後まで信じない不完全な者がいる(復活したイエスを前に疑う弟子(28:17))。